

## 談話構造における視点の統一度が日本語テキストの読み処理に及ぼす影響

魏志珍（中華大学）・玉岡賀津雄（名古屋大学）・大和祐子（国際交流基金日本語試験センター）

### 要旨

本研究は、自己制御読みによるオンライン実験法を用いて、日本語母語話者による日本語のテキストの読みにおける視点の統一度の影響を調べたものである。その結果、視点の一貫性の欠如の影響は、視点が転換された箇所だけではなく、その後の箇所の読みにも及ぶことが分かった。

### 1. はじめに

テキストは、意味的なつながりを持つ複数の文の連鎖によって構成されたまとまりのある集合体である。その全体的なまとまりを支える一つの要素としては「視点」が挙げられる。視点とはある事態に対して話者が発話を行う際の空間的・時間的・心理的な位置を意味し(澤田, 1993), 何らかの形で言語化されるものと定義する。視点という用語は、話し手や書き手がどこから見ているかという〈視座〉と、どこを見ているかという〈注視点〉の2つの意味で用いられることが多く、本研究では主に〈視座〉に注目して検討する。

ある事態について描写する際、話し手や書き手が各自の視点に応じて表現を使い分けることにより、「太郎が花子に傘をあげた／太郎が花子に傘をくれた／花子が太郎から傘をもらった」のように、同じ出来事であっても、いくつかの異なる描写ができるが、基本的に単一の文は一つの視点しか持ち得ないという視点の一貫性の原則が守られなければならない(久野, 1978)。この原則は文レベルのみならず談話レベル(テキスト)においても適用されるものである。池上(1983)は、大きな段落の切れ目がない限り、視点の一貫性がテキスト構成上の重要な成立条件として要求されると述べている。この原則に違反するテキストは、繋がりに欠けた不自然なものになり、読み手に分かりにくく感じられる恐れがあるとされている(神尾, 1985; 田中, 1996)。実際、日本語学習者の談話や文章に見られる不自然さ・分かり難さについて視点の観点から検討した研究がある(林, 2004; 奥川, 2007; 坂本, 2005; 田代, 1995; 渡邊, 1996 など)。これらの研究では、日本語学習者は、視点の一貫性を維持せず複数の視点から事態を描写する傾向にあるため、彼らの産出した談話や文章は不自然で分かりにくいことを指摘している。このことは、テキストの読み難さが視点の一貫性の欠如と関連していることを示唆している。

そこで、本研究では、心理言語学の反応時間パラダイム(reaction time paradigm)を適用したオンラインの実験法を用い、日本語テキストの読み処理における視点の影響について、読み処理の過程に焦点を当てて検証する。

## 2. 先行研究と問題の所在

日本語の談話における視点の一貫性については、産出(writing/speaking)の観点から考察を行った研究(魏, 2010; 金, 2001; 中浜・栗原, 2006; 奥川, 2007; 田代, 1995; 渡邊, 1996 など)が数多く見られる。その多くは、被験者に複数のコマから構成された漫画を見せて、その内容を口頭もしくは筆記で描写させ、産出された談話について視点の統一度および視点表現の使用頻度を検討したものである。これらの実証的研究は、日本語母語話者が場面に応じて他の人物の行動を描写することがあっても、受身表現、授受表現、移動表現などのいわゆる視点表現を使用し、視点を終始同一人物に固定して描写する傾向が顕著であると報告しており、日本語母語話者に視点を統一する傾向があることを産出の観点から実証している。

一方、読みの観点から、日本語の談話における視点の一貫性を考察した研究は、管見の限り、坂本・康(2008)のみである。坂本・康(2008)は、視点の一貫性とテキストの読み易さとの関連性に着目し、視点の統一度に違いのある2つの文章を日本語母語話者に読ませ、いずれが分かりやすいかを選ばせる方法で調査を行った。その結果、視点の統一度が高い文章の方を選んだ日本語母語話者が大多数を占めており、視点が統一されている文章の方が分かりやすいと感じられる傾向があることを示した。

このように、日本語の談話における視点の特徴について、産出の観点から検証した結果は、従来の視点に関する理論的研究で論じられている視点の一貫性という原則と一致することが明らかにされている。また、読みの観点による意識調査の結果からは、文章の視点の統一度が読み易さと関わっていることも分かってきた。しかしながら、視点の統一度がテキストの読みにどのような影響を及ぼすのかについては、まだ明らかではない。先に挙げた坂本・康(2008)の調査は、テキストを読んだ後の被験者の主観的判断に依拠した質問紙によるものであるため、実際に被験者によるテキストの読み活動そのものをオンラインで測定しているわけではなく、読み処理の過程を直接的に反映するものではないと言える。こうした現在進行中の言語処理過程を明らかにするために、反応測度(response measure)を持つオンライン法を用いた実証的研究が広く行われており(阿部・桃内・金子・李, 1994)、自己制御読み(self-paced reading)はその手法の1つである。

自己制御読みを用いて、英語の文処理と視点の一貫性との関連性を検討した研究には、Black, Turner and Bower(1979)がある。彼らの研究では、事態を眺めるための立脚点として視点を捉えている。読み手は“Bill was sitting in the living room reading the paper when John went into the living room. (p.190)”という複文の前半だけを読んだ限りでは、話し手の視点は、“Bill”と同じ空間に置かれていると想定して読み進めるであろう。しかし、複文の後半に“went”という動詞が来ると、話し手の視点は、“Bill”ではなく、“John”と同じ空間に置かれることになる。Black, Turner and

Bower (1979)は、このように視点が変化した文を、視点の一貫性が低い文として捉えている。一方、上記の例文の“went”の代わりに“came”という動詞が来た場合は、視点が統一されている文であると捉えている。この基準に基づき、Black, Turner and Bower (1979)は、3つの単文のみで構成された短いテキスト(例: Alan hated to lose at tennis. Alan played a game of tennis with Liz. After winning, she [came/went] up and shook his hand. (p.191))および複文(上記の例を参照)の2種類の実験材料を用いて、「come/go」と「bring/take」という2種類の視点表現を入れ替えて視点が統一されているものとそうでないもののそれぞれ対応するペアを用意した。具体的には、複文と短いテキストはそれぞれ16対(合計32文/テキスト)が用意されており、その16対のうち、「go/come」の対応と「bring/take」の対応がそれぞれ8対ずつ含まれている。実験<sup>1</sup>は英語母語話者24名を対象に行い、「come/go」や「bring/take」の入れ替えが行われた複文の後半の文および短いテキストの3つ目の単文、の読み時間を視点の統一と不統一の対応のあるペアを使って比較している。その結果、「come/go」と「bring/take」の対応するペアでは、視点が統一されている短いテキストや複文の方が、視点が統一されていないものよりも、読み時間が短く、迅速に処理されることが示された。この実験では、英語において、視点表現を用いた文の視点が統一されているかどうかは当該文の認知処理に影響を与えることが示された。これは、久野(1978)が提示した文における視点の一貫性の原則を裏付ける結果である。

しかし、この研究で実験に用いられたのは3つの単文のみで構成された短いテキストと複文であった。そのため、文レベルにおける視点の統一と不統一の対応ペア間の比較を検討することはできるものの、(1)視点の一貫性がテキスト処理にどのように影響するのか、(2)視点が統一されていない部分のみが読み処理に影響するのか、それともそれ以外の部分も何らかの影響を与えるのか、などの文レベルを越える談話レベル(テキスト)の流れの中で検討するのは難しい。

そこで、本研究では、以上のような問題意識を踏まえ、文レベルではなく談話レベルのテキストに着目し、日本語のテキストの読み処理における視点の統一度の影響について、視点の統一度の異なるテキストのオンラインでの処理における認知負荷を固定窓式の自己制御読み(fixed-window self-paced reading)によって測定する。さらに、テキストの読後に内容の理解を読解テストで測定する。具体的には、(1)視点の統一度はテキストの読み処理の正確さに影響するか、(2)視点の統一度はテキストの読み処理の迅速さ

---

<sup>1</sup> Black, Turner and Bower(1979)では、オンライン法である自己制御読みに、オフライン法である分かり易さに対する7段階尺度評価(Comprehensibility ratings)、内容再生(Recall)、書き直し(Editing)の3実験を加えた計4実験をそれぞれ異なる被験者を対象に実施した。ここでは、本研究と最も関連のある自己制御読みのみを取り上げることとする。

に影響するか、また、もし影響するとすれば、(3)それはどういう特徴を持つ文でどの程度か、という3つの課題を設定する。本研究はこれらの課題を検討して、テキストおよびテキストを構成する個々の文の処理における視点の統一度の影響を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究方法

#### 3.1. 被験者

被験者は日本国内の大学に在籍する学部生、大学院生等 48 名(男性 20 名、女性 28 名)の日本語母語話者である。本実験ではこれらの被験者を 24 名ずつの 2 グループに分けた。被験者の年齢は、平均で 22 歳と 10 カ月で、標準偏差は 4 歳と 5 カ月であった。

#### 3.2. 実験に使うテキスト

話し手や書き手が視点を統一させるために用いる統語的な手段として、受身表現、授受表現、移動表現などのいわゆる視点表現がある(久野, 1978; 森田, 2002など)。テキストがこれらの視点表現を持たない場合や、視点表現を駆使して、しかも視点が統一されていない場合には、個々の文の示す内容が繋がりに欠けた不自然なものとなり、その結果、テキストの内容理解が難しくなる傾向があるとされている。視点表現は、視点の一貫性の維持に深く関わっていることが多くの研究(久野, 1978; 大塚, 1995; 田中, 2004; 渡邊, 1996など)で確認されている。そこで、本実験で使用したテキストは、500字程度の自作ストーリー『自転車』と『道案内』の2種類とした。それぞれのテキストの視点の統一度に高低の差を設けるために、本研究では視点表現を用いることにした。本研究における視点の判断基準は、表1の通りである。

表 1. 本研究における視点の判断基準

視点表現	例文	視点の所在
(1)受身表現 (ら)れる	(a)太郎が花子に <u>殴</u> られた。	【太郎】
(て)くれる	(b)太郎が花子に本を <u>く</u> れた。	【花子】
(2)授受表現 (て)もらう	(c)太郎が花子に本を <u>もら</u> った。	【太郎】
あげる*	(d)太郎が花子に本を <u>あ</u> げた。	【太郎／中立】
てあげる	(e)太郎が花子に本を <u>貸</u> して <u>あ</u> げた。	【太郎】
(3)移動表現 (て)いく*	(f)太郎が花子に <u>会</u> いに行 <u>っ</u> た。	【太郎／中立】
(て)くる	(g)太郎が花子に <u>会</u> いに <u>来</u> た。	【花子】
無使用*	(h)太郎が花子の家を通りか <u>っ</u> た。	【中立】

注：下線を引いた部分は、視点表現が用いられた箇所である。アスタリスク(\*)を付けた表現は、本研究において中立視点として扱うことを示す。

文中に視点表現が使われると、その視点表現から話し手や書き手の視点の位置を判断することができる。例えば、表1の受身表現文(a)では、「殴ら

れた」が用いられていることにより、話者の視点が「太郎」にあることが分かる。また、授受表現文(e)については、補助動詞「てあげる」を用いない「太郎が花子に本を貸した」のような形が中立の視点であると考えられるため、(e)のような「てあげる」を用いると、主語寄りの視点を要求する(久野, 1978)。一方、表1の(h)のような視点表現が使われていない文の場合や、(f)の移動表現「(て)いく」や(d)の授受表現「あげる」が用いられた文の場合には、話者が動作主の「太郎」の視点を取って描写したのか、それとも中立の視点を取って客観的に描写したのかは、両方の可能性があり(久野, 1978)、第三者が断言することはできないため、分析する際に中立視点として扱う研究も多く見られる(魏, 2010; 栗原, 2003; 中浜・栗原, 2006; 大塚, 1995など)。

本研究では、先行研究の知見を援用し、表1に示した基準に基づいて、視点表現を持たない文および「(て)いく」や「あげる」が用いられた文を客観的な描写文とし、各テキストについて、それぞれの内容を変えない範囲で、テキストで使われている(1)受身表現「(ら)れる」、(2)授受表現「(て)くれる／(て)もらう／(て)あげる」および(3)移動表現「(て)いく／(て)くる」の3種類の視点表現を使って、テキスト全体の視点の統一度が高いものと低いものを作成した(2対の合計4つのテキスト)。具体的な視点の転換の方法について、『自転車』のテキストを例に説明する。図1は、『自転車』の視点の統一度が高いテキストから前半の部分抜粋したものである。図1の右側に示したのは左側のP番号で提示された文の視点の位置である。

P1	ナオキは誕生日に自転車を買ってもらいました。	ナオキ
P2	そこで、	中立
P3	ツバサに自慢しようとツバサの家に行きました[→来ました]。	[→ツバサ]
P4	ツバサは毎朝いつも庭の掃除をしているので、	中立
P5	ナオキが訪ねて行った時も掃除をしていました。	
P6	そこでナオキはツバサに声をかけると、	ナオキ
P7	ツバサは掃除を中断し、	
P8	ナオキに近づいて来ました[→行きました]。	[→中立]
P9	ツバサはすぐにナオキの自転車が新型モデルだと気づき、	中立
P10	思わず自転車のことを褒めました。	
P11	その後、	中立
P12	ツバサ[→ナオキ]はナオキ[→ツバサ]に自転車を貸してくれるよう頼みました[→頼まれました]。	[→ナオキ]
P13	ナオキは優しい子なので、	ナオキ
P14	ツバサに貸してあげました[→くれました]。	[→ツバサ]

図1. 『自転車』テキスト：視点の統一度が高いものの一部

注：灰色の部分は視点の統一度をコントロールした箇所を示す。下線部分は視点表現を入れ替えた箇所を示し、大括弧の部分は視点の統一度が低いテキストにおいて書き換えた表現および視点の変化を示す。

図1に示したように、視点の統一度の高いテキストにおいて、P1, P8, P14はそれぞれ「てもらう」、「てくる」、「てあげる」が用いられたことで、文の視点が「ナオキ」にあることが分かる。一方、P3は「行く」が用いられたことで、文の視点が中立であることになる。また、P4～P5, P9～P10, P12では、「ツバサ」が主題として取り上げられたものの、いずれも視点表現が使われていないため、本研究における視点の定義からは主題化された「ツバサ」は話者が視点を置く対象ではなく、話者が中立の視点から眺めた注目対象となる。このように、視点の統一度の高いテキストにおいて、P1からP14までの文の視点は、中立の箇所を除き、全て「ナオキ」にあることが分かる。このテキストの後半部分についても、図1に示した前半部分と同様に、テキスト全体の視点は一貫して「ナオキ」のみに置かれるよう、コントロールしてある。

一方、視点の統一度の低いテキストにおいては、図1のP3において移動表現の「行きました」を「来ました」に書き換えることにより、本来中立であった視点を「ツバサ」に転換させた。また、P8でもP3と同様に、移動表現の書き換えにより、視点を「ナオキ」から中立の視点に転換させた。また、その後のP12では、「ナオキ」を主語に昇格させ「ツバサ」を主語から降格させて、「頼みました」を「頼まれました」に書き換えることで、視点を「ナオキ」に戻すことにしたが、P14では「てあげました」を「てくれました」に書き換えることにより、視点を再度転換させた。このように、本研究では、視点の統一度の低いテキストについて、描写の視点を視点表現の制御を通して、転換させたりもとに戻したりすることで、テキストの登場人物の間で移動させ、テキスト全体の視点の一貫性を崩すことにした。

また、『道案内』のテキストについても、上記の『自転車』と同様に、視点の統一度が高いテキストについては、中立の箇所以外は描写の視点を一貫して同一人物に置くように設定し、視点の統一度が低いテキストについては、視点を全ての登場人物の間で移動させるように設定して作成した(テキストの全文は4.3節の表4を参照)。

以上のような方法で作成した『自転車』と『道案内』のテキストは、それぞれ32個と27個のPで構成されている。Pは固定窓に現れる領域であり、句読点で区切られた文を単位として設定するが、接続詞の場合は単独で提示するものとそうでないものの2種類に分けて設定した。また、各テキストについては、視点の統一度に操作を加えた箇所をそれぞれ6箇所ずつ同数になるように設けた。具体的には、『自転車』の場合は、受身表現、授受表現、移動表現の3種類をそれぞれ2箇所ずつランダムに配置することにした。一方、『道案内』の場合は、授受表現と移動表現をそれぞれ1箇所ずつランダムに配置した上で、受身表現をテキストの前部に1箇所、中部に2箇所、後部に1箇所配置するように作成した。

本研究では、実験を行う際には、これらの4テキストから、視点の統一度が高いテキストを1篇、低いテキストを1篇選び、合計2篇からなる実験材料を2セット用意して、被験者に割り当てた。また、被験者の半数に対しては視点の統一度が高いテキストを読ませた後に、視点の統一度が低いテキストを読ませることにし、残りの半数に対してはその逆の順番で読ませることにした。

### 3.3. 実験の手続き

実験は14.1インチのディスプレイを用いて、個別に行った。実験のプログラムは、画面の中央に区切られたテキストの一部(P番号で記されたユニット)を呈示して、スペースキーを押すたびに逐次、次のテキストの一部が呈示されるように設定した。被験者は、一つの呈示部分を読み終わるごとにスペースキーを押して次の呈示部分を映し出して読み進め、この作業をテキストの終わりまで繰り返す。また被験者には、あらかじめ内容を理解しながらできるだけ速く読むように指示しておいた。テキストの一部が呈示されてからスペースキーが押されるまでの時間を呈示部分の読み時間と想定し、これを当該部分について読み手の脳内で起こる読みの認知処理の時間(処理時間)と考えて、ミリ秒(ms)単位で記録した。また、それぞれのテキストを読み終えた後に、内容に関する四者択一の問題を各テキストについて3問課した(3点満点)。設問はストーリーに登場する人物の行動について問うものを中心に作成し、選択肢は正答を含め、錯乱肢についても主に視点の一貫性に操作を加えた箇所およびその後に来る箇所に関わる内容に基づいて作成した。

また、本試行に入る前に、被験者が本実験のやり方に十分慣れるように、実験に先立って、練習課題を行った。

### 3.4. 予測と分析手法

本研究では次の3つの予測に基づいて分析する。第1に、視点に関する理論的研究や産出の観点による実証的研究で指摘されているように、視点の統一度が低いテキストは内容の理解が難しくなると仮定される。つまり、視点の統一度の低い方が高い場合よりもが読解テストの得点が低くなると予測される。そこで、各テキストの読後に実施した読解テストの得点を、視点の統一度の高・低で比較して検討する。第2に、読み手の認知処理にかかる負荷が読み時間に反映されるので、視点の統一度が低いテキストの方が、視点の統一度の高いテキストよりも処理速度が長くなると予想される。したがって、自己制御読み実験で測定した各テキストの全体の読み時間を視点の統一度の高・低で比較して検討する。第3に、本テキストでは、視点を意図的に転換するために表現を書き換えた。視点が転換された表現の方が、視点の一貫性が崩されたことで、視点が転換されていない表現よりも読み時間が長くなると予測される。これについては、テキストの視点の統一度に操作を加えた箇所の文ごとの読み時間を視点の統一度の高・低で比較して検討する。

## 4. 結果と考察

#### 4.1. テキストの内容理解の正確さに対する視点の統一度の影響

表2に示したのは、被験者に課したテキストの内容理解を問う問題における、視点の統一度の高いテキストと低いテキストのそれぞれの得点の平均と標準偏差である。また、『自転車』と『道案内』のテキストの内容理解の得点について、視点の統一度の高低を対応のあるサンプルの*t*検定(以下、本研究で使った*t*検定はすべて同じ)で比較したところ、いずれのテキストについても内容の理解に視点の統一度の高低による違いはないことが分かった。すなわち、日本語母語話者は、視点の統一度の高低に関係なく、いずれのテキストの内容でもほぼ同程度に理解していることが確認された。

表 2. テキストの内容理解問題の得点(3点満点)

視点の統一度	『自転車』		『道案内』	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
高い	2.71	0.55	2.96	0.20
低い	2.54	0.66	2.96	0.20
<i>t</i> 検定	<i>t</i> (23)=1.000, <i>p</i> =0.328, <i>ns</i>		<i>t</i> (23)=0.000, <i>p</i> =1.00, <i>ns</i>	

#### 4.2. 『自転車』のテキストの読み時間における視点の統一度の影響

続いて、テキストの内容を理解するためにかかった読み時間が、視点の統一度の影響を受けるかどうかについて検討する。そのために、まず『自転車』のテキストについて、視点の統一度の高いものと低いものの32対の文からなる2つのテキストの全体の平均読み時間を対応のあるサンプルの*t*検定で検討した。その結果、視点の統一度の低いテキストの全体の平均読み時間( $M=1,250\text{ms}$ ,  $SD=465\text{ms}$ )は、視点の統一度の高いテキスト( $M=1,074\text{ms}$ ,  $SD=405\text{ms}$ )よりも有意に長く [ $t(31)=-5.506$ ,  $p<.001$ ], 視点の統一度による影響が見られた。さらに、視点の統一度の高いテキストと低いテキストのそれぞれ対応する箇所を読み時間の違いを、上記と同様の*t*検定で検討した。その結果、表3に示すように、視点の転換がある6箇所(受身表現のP12とP25, 授受表現のP14とP30, 移動表現のP3とP8)のうちの3箇所(受身表現はP12とP25の2箇所, 授受表現はP14の1箇所)および視点の転換の後に来る2箇所(P15とP31)において、視点の統一度が低いテキストの方が高いテキストよりも読み時間が有意に長くなっていた。

このように、視点の統一度の低いテキストと高いテキストの読み時間に有意差が出た箇所には、それ自体に視点の転換が起こっている箇所のみならず、先行する部分に視点の転換が起こっている箇所も含まれていることが分かった。つまり、視点の統一度はテキストの読み処理の迅速さに影響を与え、しかも視点の転換された箇所だけではなく、転換された後の部分も関与することが示された。これは、視点が一度転換され、さらにそれがもとに戻されることによって、視点の再転換が起こったことによるものであると考えられる。例えば、『自転車』についての視点の統一度が低いテキストから抜粋した(1)の P11~P16 のように、P12 では「頼まりました」が使われていることにより、視点転換されて、「ナオキ」の視点から描写されていることが分

かる。その後の P13 と P14 は、P12 の話の延長であるため、本来は「ナオキ」に視点が置かれるべきであると思われる。しかし、P14 では「てくれました」が使われているので、視点の再転換が行われたことにより、視点が本来転換されてはならない部分で「ツバサ」に転換され、もとの視点に戻されていることが分かる。こうした視点の再転換が読みに対する認知処理の負荷を高めることになり、その影響を受け、P14 の後に来る P15 では読み時間が有意に長くなったのであろう。

(1) P11 その後、

P12 ナオキはツバサに自転車を貸してくれるよう頼まれました。

P13 ナオキは優しい子なので、

P14 ツバサに貸してくれました。

P15 するとツバサは調子にのって、

P16 坂を猛烈なスピードで下って行きました。

また、上で挙げられた(1)のように、これらの視点が転換された箇所は、いずれもまとまった内容を持つテキスト内の任意の部分であり、話題の転換などの大きな段落の切れ目に当たる部分ではない。すなわち、前述した池上(1983)が言及した、本来は視点が転換されるべきではない箇所当たる部分であると考えられる。本実験の結果より、(1)のP12とP14においては、いずれも視点の統一度が高いテキストの読み時間が有意に短いことが分かった。このことは、視点の転換が不必要な箇所で行われると、読み手が当該箇所を理解するのに時間を要し、通常より大きな負荷がかかることを示している。

一方、前述した視点の転換がある6箇所の中で、授受表現を用いた2箇所のうちのP30の1箇所と移動表現を用いたP3とP8の2箇所において、いずれも視点の統一度の低いテキストの方が、視点の統一度の高いテキストより読み時間が若干長くなっている。しかし、これらの読み時間の差は有意ではなかった。

移動表現の「(て)いく」と「(て)くる」は、視点に応じて使い分けるものであり、それぞれの視点の位置が対立しているが、話し手の視点が到着点以外の場所に置かれる「(て)いく」にしても話し手の視点が到着点に置かれる「(て)くる」にしても、いずれも動作主(移動主体)が主語に立ち、動作主がどこからどこまで移動したかという移動のルートが理解されやすい表現である。また、授受表現については、『自転車』のテキストのP14とP30では、いずれも視点の統一度が高いテキストで「てあげる」、視点の統一度が低いテキストで「てくれる」が用いられている。「てあげる」と「てくれる」は前述した移動表現と類似した特徴を持つ。話し手の視点が動作主にある「てあげる」と話し手の視点が非動作主にある「てくれる」は、それぞれの視点の位置は異なるが、動作主が主語に立つという点では共通している。これらの箇所においてテキスト間にそれぞれ有意な違いが見られなかったことは、日本語母語話者がこれらの箇所を読む際に、ほぼ同じ処理速度で主要情報を読み取っていたことを示している。すなわち、視点の統一度の低いテキスト

の当該箇所を読む際にかかった視点の不統一から生じた認知処理の負荷は、読み時間の遅延が出るほど大きなものではなかったと考えられる。これは、文構造の類似性が視点の統一度の影響を緩和したためではないかと推測され

表3. 『自転車』のテキストの読み時間における視点の統一度の高・低の違いに関する検定の結果

#	視点の統一度の高い条件	M	SD	視点の統一度の低い条件	M	SD	t 値	p
P1	ナオキは誕生日に自転車を買ってもらいました。	1775	519	ナオキは誕生日に自転車を買ってもらいました。	2000	779	-1.37	
P2	そこで、	700	285	そこで、	725	239	-0.38	
P3	ツバサは自慢しようとしてツバサの家に行きました。	1521	466	ツバサは自慢しようとしてツバサの家に来ました。	1567	606	-0.33	
P4	ツバサは毎朝いつも庭の掃除をしているので、	1628	648	ツバサは毎朝いつも庭の掃除をしているので、	1778	607	-1.09	
P5	ナオキが訪ねて行った時も掃除をしていました。	1377	446	ナオキが訪ねて行った時も掃除をしていました。	1571	602	-1.46	
P6	そこでナオキはツバサに声をかけると、	1265	375	そこでナオキはツバサに声をかけると、	1408	567	-1.16	
P7	ツバサは掃除を中断し、	913	229	ツバサは掃除を中断し、	1006	335	-1.40	
P8	ナオキに近づいて来ました。	773	298	ナオキに近づいて行きました。	916	511	-1.40	
P9	2002 ナオキの自転車が新型モデルだと気づき、	2002	342	ナオキの自転車が新型モデルだと気づき、	1931	479	0.36	
P10	思わず自転車のことを褒めました。	963	340	思わず自転車のことを褒めました。	1015	326	-0.71	
P11	その後、	610	284	その後、	609	198	0.00	
P12	ツバサはナオキに自転車を貸してくれるよう頼みました。	1864	756	ナオキはツバサに自転車を貸してあげるよう頼みました。	2488	1598	-2.10	*
P13	ナオキは優しい子なので、	867	333	ナオキは優しい子なので、	981	354	-1.17	
P14	ツバサに貸してあげました。	622	188	ツバサは貸してくれました。	1076	1029	-2.30	*
P15	するとツバサは調子にのって、	742	291	するとツバサは調子にのって、	1320	968	-2.87	**
P16	坂を猛烈なスピードで下って行きました。	1000	322	坂を猛烈なスピードで下って行きました。	1114	526	-1.06	
P17	もはやハンドル操作ができなくなり、	951	399	もはやハンドル操作ができなくなり、	1081	560	-1.22	
P18	坂の下にあった木に正面から衝突してしまいました。	1500	633	坂の下にあった木に正面から衝突してしまいました。	1628	754	-0.90	
P19	ナオキはその瞬間目を手で覆い隠していました。	1615	774	ナオキはその瞬間目を手で覆い隠していました。	1679	682	-0.33	
P20	手の覆いをとると、	807	366	手の覆いをとると、	830	311	-0.25	
P21	めちやくちやに隠れた自転車が目に入ってきました。	1204	464	めちやくちやに隠れた自転車が目に入ってきました。	1384	605	-1.09	
P22	いくらナオキが優しいからと言っても、	890	217	いくらナオキが優しいからと言っても、	1082	477	-1.88	
P23	さすがにこれは許せません。	715	252	さすがにこれは許せません。	827	400	-1.29	
P24	せつかくの新しい自転車を隠してしまい、	1113	557	せつかくの新しい自転車を隠してしまい、	1176	477	-0.44	
P25	激怒したナオキはツバサをひどく責めました。	1360	449	ツバサは激怒したナオキにひどく責められました。	2014	868	-3.49	**
P26	しかし、	562	256	しかし、	622	206	-1.59	
P27	ナオキがよく見ると、	626	267	ナオキがよく見ると、	702	291	-1.17	
P28	ツバサは相当ひどい怪我をしていました。	950	265	ツバサは相当ひどい怪我をしていました。	1073	332	-1.64	
P29	ナオキは優しいので、	629	216	ナオキは優しいので、	709	239	-1.55	
P30	ツバサの手当てをしてくれました。	810	457	ツバサの手当てをしてくれました。	971	511	-1.13	
P31	ツバサは何度も謝ってきたので、	867	242	ツバサは何度も謝ってきたので、	1111	581	-2.31	*
P32	ナオキは自転車を壊したことを許してあげました。	1148	460	ナオキは自転車を壊したことを許してあげました。	1609	1186	-1.73	

注1：本研究では、対応のあるサンプルの検定を使用した。 $n=48$ (視点の違う各テキスト24名ずつ)。提示されている各Pの読み時間は、生の読み時間である。 $* p<0.05$ ,  $** p<0.01$ 。  
 注2：灰色のセルは、視点の統一度を表す。下線部分が視点を変えられた部分に書き直した箇所を示す。下線部分が視点を変えられた部分がある。ただし、視点の転換は統一度の低い条件のみで起こる。

る。なお、読み時間に有意な違いが見られた授受表現の P14 については、P12 の受身文の後に続いて現れる複文の主文に相当する箇所であるため、P12 で視点が転換された影響を受けて、読み時間の遅延が起こったと考えられる。すなわち、前の箇所において、視点の転換によってかかった読み処理の負荷がまだ解消されていない状態で、さらに視点が転換されたために、文の読みに再び認知負荷がかかり読み時間が長くなったと思われる。

#### 4.3. 『道案内』のテキストの読み時間における視点の統一度の影響

『道案内』についても、『自転車』と同様に、27 対からなる視点の統一度の高低の文の全体の平均読み時間を  $t$  検定で検討した。その結果、視点の統一度の低いテキスト ( $M=1,436\text{ms}$ ,  $SD=728\text{ms}$ ) は、視点の統一度の高いテキスト ( $M=1,270\text{ms}$ ,  $SD=535\text{ms}$ ) よりも有意に長く [ $t(26)=-2.542$ ,  $p<.05$ ], 視点の統一度による影響が見られた。さらに、視点の統一度の高いテキストと低いテキストの対応する箇所について  $t$  検定で読み時間の違いを検証した。その結果、表 4 に示す通り、視点の転換がある 6 箇所(受身表現は P4, P12, P18, P26 の 4 箇所, 授受表現は P20 の 1 箇所, 移動表現は P27 の 1 箇所)のうちの 4 箇所(受身表現は P18, P26 の 2 箇所, 授受表現は P20 の 1 箇所, 移動表現は P27 の 1 箇所)において、視点の統一度の低いテキストの方が高いテキストよりも読み時間が有意に長くなっていた。この結果から、『道案内』においても、『自転車』と同様に、視点が転換された部分では、読み時間の遅延が観察され、読み処理に負荷がかかっていることが分かった。しかし、その一方で、視点の統一度の高いテキストの方が低いテキストより読み時間が有意に長かった箇所(受身表現の P4)があることも観察された。では、なぜこの箇所でこのような逆の結果が見られたのであろうか。考えられる理由としては、次のようなことが挙げられる。

一般的に、視点は被動作主より動作主の方に置かれやすく、動作主が主語として立てられた能動文は被動作主が主語として立てられた受身文に対し、無標である(森山 2007; 奥津 1983, 1992 など)。このことから、テキスト処理において、有標な受身文を処理する際にかかる認知的負荷は、無標な能動文よりも高い可能性があると考えられる。実際、Tamaoka, Sakai, Kawahara, Miyaoka, Lim and Koizumi (2005)では、修飾語を持たないシンプルな SOV 語順の能動文(例えば、「太郎が健二を蹴った」)の平均処理時間が 1,209 ミリ秒であるのに対し、同様にシンプルな SOV 語順の受動文(例えば、「健二が太郎に蹴られた」)の平均処理時間は 1,521 ミリ秒であり、その差は 312 ミリ秒であることが報告されている。両者は完全に同じ文ではないので、厳密に言えば直接比較することはできないが、受動文の方が能動文よりも処理負荷が大きいことがうかがえる。つまり、テキストの読み処理においては、視点の統一度の他に、文の統語的複雑さも独立した要因として影響すると考えられる。とりわけ、テキストの冒頭部分では、統語構造の影響がより顕著であることが予想される。テキストの冒頭部分では、全体の視点が一貫してどの登場人物に置かれて描写されていくかがまだ把握できないため、視点の

統一度より、むしろ能動態か受動態かという文構造の違いがテキストの読み処理に直接的に影響すると考えられるからである。

以上の予想を念頭に置いて、改めて P4 で見られた結果について検討してみる。P4 では、「すぐ電球を買ってきて欲しい」という内容を示す副文を、視点の統一度の低いテキストでは「お母さんはショウタに頼んだ」という能動態の主文で受けており、視点の統一度の高いテキストでは「ショウタはお母さんに頼まれた」という受動態の主文で受けている。この能動態と受動態という統語構造の違いが、処理速度の違いを生み出したのではないかと思われる。つまり、P4 では視点の統一度の高いテキストにおいては、視点の統一は保たれているものの、態の変化によって文の統語構造がより複雑になったために、処理速度が遅くなるという結果を招いた可能性が考えられる。とりわけ、「お母さん」は P2 で導入された登場人物であり、P4 の主文で注目対象として主語に取り上げられた能動態の文の方がより処理されやすいであろう。このように、テキストの冒頭部分では、テキストの読み処理に対する視点の統一度の高低による影響が弱く、視点の統一度より文構造による影響の方が相対的に強いと考えられる。

実際、テキストの中頃になると、視点の統一度と文構造の複雑さのそれぞれが文処理に及ぼす影響の度合いが変わってくる。同じ『道案内』のテキストの中頃に出てくる P12 では、視点の統一度の低いテキストにおける能動態の文よりも、視点の統一度の高いテキストにおける受動態の文の方が約 250 ミリ秒速く読まれていた。ここで観察された読み時間の差は有意ではなかったが、冒頭の P4 で見られたような、視点の統一度の高いテキストの方が読み時間が有意に長いという結果は見られなかった。このことから、テキストの中頃に来ると、冒頭部分とは異なり、視点の統一度による影響が次第に強くなって、能動態か受動態かという統語構造の影響が消え、さらに受動態の方が若干速く処理されるようになったと推測される。つまり、能動態か受動態かという統語構造の違いが影響するのであれば、P12 は視点の統一度が低いテキストの方が能動文であるので、視点の統一度が高いテキストの受動文より迅速に処理されるはずである。ところが、前述したように、実際には、視点の統一度が高いテキストの受動文の方が、若干速く処理されていることが観察された。これは、視点の一貫性が保たれていることにより、読み処理を行う上で統語構造の複雑さによる負荷が軽減されたためではないかと考えられる。この現象は、P4 で見られた傾向と相反するものである。また、このことから、視点の統一度がテキストの読み処理に影響してくるのは、本テキストのような短編のものであれば、登場人物がある程度確定する**冒頭の 10 文(P1~P10)**以降のことになるとと思われる。

表4. 『道案内』のデキキストの読み時間における視点の高・低の違いに関するt検定の結果

#	M	SD	視点の統一度の高い条件	M	SD	視点の統一度の低い条件	t値	p
P1	2620	753	ジョウタは部屋で明日のテストの勉強をしていたところ、	2566	1341	ジョウタは部屋で明日の中間テストの勉強をしていたところ、	-0.21	
P2	1254	601	お母さんがジョウタの部屋に入ってきた。	1296	723	お母さんがジョウタの部屋に入ってきた。	0.25	
P3	1210	901	台所の電球が切れてしまったので、	1092	416	台所の電球が切れてしまったので、	-1.19	
P4	1769	941	すぐ電球を買ってきて欲しいとジョウタはお母さんに頼まれた。	1464	744	すぐ電球を買ってきて欲しいとお母さんはジョウタに頼んだ。	-2.13	*
P5	1997	878	優しいジョウタはお母さんに勉強の邪魔をされたにもかわらず、	1995	867	優しいジョウタはお母さんに勉強の邪魔をされたにもかわらず、	-0.02	
P6	694	252	すぐ勉強を中断し、	688	207	すぐ勉強を中断し、	-0.10	
P7	1222	442	お母さんからお金をもらって電球を買いに出かけた。	1201	318	お母さんからお金をもらって電球を買いに出かけた。	-0.22	
P8	1667	675	電器屋で電球を買ったジョウタは着り道もせずに、	2026	1282	電器屋で電球を買ったジョウタは着り道もせずに、	1.54	
P9	769	311	まっすぐ家に帰ることにした。	716	429	まっすぐ家に帰ることにした。	-0.45	
P10	856	483	家に向かって歩いていたら、	661	235	家に向かって歩いていたら、	-2.06	
P11	1167	518	通りすがりのお婆さんに呼び止められた。	1042	298	通りすがりのお婆さんに呼び止められた。	-1.29	
P12	1430	631	ジョウタはそのお婆さんにバス停の場所を聞かれた。	1694	726	そのお婆さんはジョウタにバス停の場所を聞いた。	1.43	
P13	1285	631	お婆さんは両手に重そうな荷物を抱えていたので、	1191	600	お婆さんは両手に重そうな荷物を抱えていたので、	-0.62	
P14	1081	623	優しいジョウタはお婆さんの荷物を持って、	1269	969	優しいジョウタはお婆さんの荷物を持って、	1.04	
P15	730	327	バス停まで一緒に歩いてあげた。	799	303	バス停まで一緒に歩いてあげた。	0.78	
P16	613	211	バス停に着いたら、	632	253	バス停に着いたら、	0.37	
P17	658	255	ちようどバスが来ていた。	688	247	お婆さんはジョウタに先にバスに乗ってと言われた。	0.46	
P18	1992	1136	ジョウタはお婆さんに先にバスに乗ってと言った。	2745	1420	お婆さんはジョウタに先にバスに乗ってと言われた。	2.75	*
P19	570	151	そして、	589	286	そして、	0.31	
P20	2446	1394	お婆さんの荷物はジョウタがバスの中で持っていてあげた。	3556	2472	お婆さんの荷物はジョウタがバスの中で持っていてあげた。	2.04	*
P21	1137	485	お婆さんはジョウタの親切さに感心し、	1395	740	お婆さんはジョウタの親切さに感心し、	2.44	
P22	1281	366	持っていたクーキーをお礼としてジョウタにくれた。	1716	1382	持っていたクーキーをお礼としてジョウタにくれた。	1.70	
P23	1368	798	ジョウタはクーキーをもらってバスから降りようとしたところ、	1645	1139	ジョウタはクーキーをもらってバスから降りようとしたところ、	0.99	
P24	784	223	運転手さんにも褒められた。	856	224	運転手さんにも褒められた。	1.08	
P25	1337	459	運転手さんもお婆さんの優しい行動に感心したのだ。	1368	531	運転手さんもお婆さんの優しい行動に感心したのだ。	0.27	
P26	1380	713	お婆さんと運転手さんに別れを告げた。	2208	1330	お婆さんと運転手さんに別れを告げられた。	3.08	**
P27	975	457	その後、ジョウタは急いで家に帰って行った。	1669	1243	その後、ジョウタは急いで家に帰って来た。	2.91	**

注1:本研究では、対応のあるサンプルのt検定を使用した。n=48(得度の違う各デキキスト24名ずつ)。提示されている各Pの読み時間は、生の読み時間である。\* $p<0.05$ 、\*\* $p<0.01$ 。  
 注2:灰色のセルは、視点の統一度が低く変えるために書き直した部分である。ただし、視点の転換は統一度の低い条件のみで起こる。

## 5. おわりに

本研究では、視点の一貫性の欠如が日本語のテキストの読みにとのよう  
に影響するかについて、読み処理の過程を即時的に反映できる自己制御読み  
と読後の内容理解を測定する読解テストを用いて、視点の統一度の異なるテ  
キストを読む場合の理解度と処理の迅速さを比較検討した。

まず、研究課題(1)「視点の統一度はテキストの読み処理の正確さに影響  
するか」については、それぞれのテキストの読後に内容の理解度を測るため  
に行った読解テストの結果から、比較対象となっている視点の統一度の高・  
低テキストの内容理解は同程度であり、視点の統一度の違いによる内容理解  
の差がないことを確認した。この結果を踏まえて、次の研究課題(2)「視点  
の統一度はテキストの読み処理の迅速さに影響するか」では、本実験の主要  
な指標である読み時間を手掛かりにして、視点の統一度の高低の影響を検討  
した。テキスト全体の平均読み時間に関しては、『自転車』と『道案内』の  
いずれのテキストでも、視点の統一度の影響が認められ、視点の統一度の高  
いテキストは、視点の統一度の低いテキストに比べより迅速に処理されたこ  
とから、その読みにかかる負荷が相対的に小さく、より読み易いことが示唆  
された。これは、坂本・康(2008)の意識調査の知見と一致し、さらに池上  
(1983)、神尾(1985)などの視点に関する理論的研究の知見および田代(1995)、  
田中(1996)、渡邊(1996)などの産出の観点による調査で得られた知見を、実  
際の読みにおけるオンラインでの認知処理過程の結果で裏付けるものになっ  
た。

また、視点の統一度がテキストの読みに与える影響についてより詳細に  
検討した研究課題(3)「それはどういう特徴を持つ文でどの程度か」では、  
『自転車』と『道案内』のそれぞれのテキストの文ごとの読み時間を比較し  
たところ、視点を転換させるために視点表現を用いた箇所またはその後に来  
る箇所において読み時間の遅延が認められた。すなわち、テキストの視点の  
一貫性が崩れると、崩れた箇所の読みにより大きな負荷がかかることになり、  
さらにその後の読み処理にも影響を及ぼす場合があることが示された。また、  
上述した視点表現が用いられた箇所について、受身表現の処理過程における  
読み時間の違いから、視点の統一度がテキスト全体に与える影響は一様では  
なく、特にテキストの冒頭においてその影響が相対的に弱い傾向があること  
が分かった。一方、授受表現の「てあげる」対「てくれる」と移動表現の  
「(て)いく」対「(て)くる」では、それぞれの読み時間の差に有意な違いが  
出た箇所(『自転車』の P14 と『道案内』の P20, P27)もあり、出なかった  
箇所(『自転車』の P3, P8, P30)もあるという異なる結果が生じていた。こ  
うした現象については、次のような理由が考えられる。本研究で使用した授  
受表現と移動表現は、それぞれの表現の視点の位置が異なるものの、基本  
的な文構造は類似している。こうした文構造の類似性が視点の統一度の影響  
を緩和したことで、読み時間に有意差が出なかったと考えられる。一方、有  
意差が出た箇所は、いずれも先行する部分に視点の転換があり、その部分で  
解消しきれなかった処理負荷の影響を受けたことと当該箇所の視点の不統一か  
ら生じた負荷があったことで、処理負荷が高まり、この累積した処理負荷を

文構造の類似性によって軽減することができず、読み時間の遅延につながったと考えられる。

以上のように、日本語のテキストの視点が適切に統一されているかどうか、読みのプロセスにおける読み時間に影響を与えることが示唆された。本研究では、同じテキスト内で統語構造を変えて視点の統一度を変換することで、対応のある文のオンラインでの読み時間およびテキスト全体の処理過程の変化を直接比較することができた。さらに、坂本・康(2008)では、検討されていなかった読みの処理過程の実態を明らかにすることができた。本研究では、視点の統一度が日本語母語話者のテキストの読みに影響することを実証した。また、視点の統一度を制御するために用いた視点表現については、本研究では受身表現、授受表現、移動表現を同等に扱ったが、実際、これらの3種類は視点の統一度に対する影響の度合いが様ではないことが実験の結果から分かった。ただし、本研究では、2種類の4つのテキストしか扱っておらず、刺激文の数が少ないので、本研究の結果からすぐに一般化した結論を導き出すことはできないであろう。さらに、視点表現には、本研究で取り上げた3種類の視点表現以外にも、例えば使役表現や使役受身表現などがあり、視点の統一度に対する影響の度合いは、意味や形式の異なる他の視点表現においても異なる傾向が示されるか、まだ明らかではない。今後はテキスト数を増やすだけでなく、他の視点表現にも対象を広げて、追加実験を行う必要がある。これらの点については、今後の課題として検討していきたい。

## 参考文献

- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五 (1994). 『人間の言語情報処理—言語理解の認知科学』東京：サイエンス社。
- 庵功雄 (2007). 『日本語におけるテキストの結束性の研究』東京：くろしお出版。
- 池上嘉彦 (1983). 「テキストとテキストの構造」国立国語研究所 (編) 『談話の研究と教育 I』東京：大蔵省印刷局, pp. 7-41.
- 奥川郁子 (2007). 「語りの談話における視点と事態把握」『筑波応用言語学研究』14: 31-43.
- 奥津敬一郎 (1983). 「何故受身か?—<視点>からのケース・スタディー」『国語学』132: 65-80.
- 奥津敬一郎 (1992). 「日本語の受身文と視点」『日本語学』11(8): 4-11.
- 大塚純子 (1995). 「中上級日本語学習者の視点表現の発達について—立場志向文を中心に—」『言語文化と日本語教育』9: 281-292.
- 神尾昭雄 (1985). 「談話における視点」『日本語学』4: 10-21.
- 金慶珠 (2001). 「談話構成における母語話者と学習者の視点—日韓両言語における主語と動詞の用い方を中心に—」『日本語教育』109: 60-69.
- 魏志珍 (2010). 「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方—日本語の熟達度との関連性」『日本語教育』144: 133-144.
- 久野暲 (1978). 『談話の文法』東京：大修館書店。

- 栗原由華 (2003). 『視点を判断する手がかりー日本語母語話者と学習者の比較を通してー』 修士学位論文, 名古屋大学大学院.
- 坂本勝信 (2005). 「中国語を母語とする日本語学習者の『視点』の問題を探る」 『常葉学園大学研究紀要』 21: 1-10.
- 坂本勝信・康鳳麗 (2008). 「日本語母語話者の視点の実態についてー [視座の統一度と文章のわかりやすさの関係] 調査と共にー」 『常葉学園大学紀要』 24: 205-217.
- 澤田治美 (1993). 『視点と主観性ー日英語助動詞の分析ー』 春日部: ひつじ書房.
- 田代ひとみ (1995). 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点ー不自然さ・わかりにくさの原因をさぐるー」 『日本語教育』 85: 25-37.
- 田中真理 (1996). 「視点・ヴォイスの習得ー文生成テストにおける横断的及び縦断的研究ー」 『日本語教育』 88: 104-115.
- 田中真理 (2004). 「日本語の『視点』の習得」 南雅彦, 浅野真紀子 (編) 『言語学と日本語教育Ⅲ』 東京: くろしお出版, pp. 59-76.
- 中浜優子・栗原由華 (2006). 「日本語の物語構築: 視点を判断する構文の手がかりの再考」 『言語文化論集』 27(2): 97-107.
- 森田良行 (2002). 『日本語文法の発想』 東京: ひつじ書房.
- 森山新 (2007). 「応用認知言語学的日本語教育の試み」 『日本認知言語学会論文集』 7: 1-11.
- 林美琪 (2004). 「上級日本語学習者の談話展開における視点の分析ー台湾人日本語学習者を中心に」 『人間文化論叢』 7: 429-440.
- 渡邊亜子 (1996). 『中・上級日本語学習者の談話展開』 東京: くろしお出版.
- Black, J. B., Turner, T. J., & Bower, G. H. (1979). Point of view in narrative comprehension, memory, and production. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 18, 187-198.
- Tamaoka, K., Sakai, H., Kawahara, J., Miyaoka, Y., Lim, H. J., & Koizumi M. (2005). Priority information used for the processing of Japanese sentences: Thematic roles, case particles or grammatical functions? *Journal of Psycholinguistic Research*, 34, 273-324.

## Effects of viewpoint consistency on reading a Japanese text

Chih-chen Wei (Chung Hua University, Taiwan)

Katsuo Tamaoka (Nagoya University, Japan)

Yuko Yamato (Center of Japanese-Language Testing, the Japan Foundation, Japan)

### **Abstract**

Using the on-line self-paced reading method, the present study investigated whether consistency in viewpoint within text affects reading times and comprehension. Four texts were prepared by changing viewpoint expressions in two different texts to create both high and low viewpoint consistencies. 48 native Japanese speakers read the texts while having their reading speeds recorded and text comprehension assessed. The results indicated that differences in reading times were found in the expressions where the viewpoint was shifted or where it recovered after the shift. In contrast, no difference in text comprehension was found between high and low viewpoint consistency texts. The present study proves that consistency in the point of view in a text influences processing times in the reading of Japanese texts.